
天使の飼い方

はざま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天使の飼い方

【Nコード】

N0146N

【作者名】

はざま

【あらすじ】

近未来の地球、どこかの街。

常識人な殺し屋と改造少年の人間愛交流。

（注意！ 人間愛のつもりでしたが、ほのかにBL臭がただよっています。また、戦闘シーンがありますので、苦手な方はお気をつけください）

序章 有刺鉄線

「ナンバー〇二一、行くぞ」

タケミは廃屋の高層ビルの影からマイクに向かって囁いた。

「はい。いつでもどうぞ」

子供の声がイヤフォンから聞こえる。タケミはそれを確認すると同時に走り出した。

目標をセットする。センターを標準に合わせる。ほぼ同時にタケミは弾を撃ち込んだ。ガガガガ、とマシンガンが空気とコンクリートを揺らす。悲鳴と怒声が聞こえたが、砂煙が舞い上がる前に残党は高所からのライフルで頭を撃ち抜かれた。

タケミは自動小銃を縦に直し、一切の生き物の音がしないことを確認すると息を吐いた。

「嬢ちゃん、仕事は終わったみてえだな」

マイクの向こうで怒ったような笑い声がした。

「嬢ちゃんじゃないって言ってるでしょう」

タケミはマフィアのボスの私室へと来ていた。顎を撫でてヒゲのないことを確認する。黒のスーツを着た背筋を伸ばして首を鳴らし、ドアをノックする。中から返事が聞こえて、先導していた男がドアを開けた。

中にいたのは、椅子に座った白髪頭の男と、その後ろに年端もいかなない少年。タケミは一度瞬きをして、それからすぐに足を動かした。背後でドアが閉まる。

「よく来てくれた、タケミくん。我がファミリーは君を歓迎する」
低い通る声で言われて、タケミは頭を下げる。

「たかが殺し屋一匹に、ここまでの待遇をしてくださって、感謝し

ます」

「その殺し屋が欲しかったのだ」

男は小さく笑った。

「それも、かの有名なリーグループから君を借りられるとは、私はついている」

男の口から上司の名前が出て、タケミは小さく表情筋を動かした。さて、と立ったまま腰を動かして話を切り出す。

「それで、私に殺してほしい輩とは誰でしょう」

男は意地悪く笑った。

「話は聞いているだろうに、回りくどい男だな」

「確認のためです」

タケミが淡々と返すと、男は少し声を低くして言った。

「我がファミリーは祖父の代からこの街に入ってきた。それからずっとこの街の裏を牛耳ってきたが、昔からのファミリーが、まだ少しだけ残っていてね。それらが、我々を陥れようと虎視眈々と狙っているのだ。そして、先日私は撃たれた」

そう言って、男は右腕を視線で指した。タケミも一瞬それを見る。「もうこれ以上寛大な措置をしてやることはないと思ってね。君にしてほしいことは、つまりこの街に住みついていいるごろつきを全て排除することだ」

男は、ゴミを捨ててくれ、というような口調で言った。タケミは無表情のまま頷いた。

「わかりました。人数はほぼ把握しています。二ヶ月もあれば、やれるかと」

これは頼もしい、と男は低く笑った。それから、気がついたように後ろを振り返る。

「君だけで十分かもしれないが、こちらで君に助っ人を一人つけよう。ナンバー〇二一、私の自慢のサイボーグだ」

そう言って、男は自分の背後にいた少年を顎で示した。タケミは二度瞬きをして、それからお辞儀をした少年に小さく礼を返した。

「今どきサイボーグは珍しくありませんが、十五歳未満のサイボーグは、条例違反ではありませんでしたか」

タケミが一言呟くと、男は、「なにを今更」と笑った。

「殺し屋が、条例など気にする方がおかしいだろう。それに、この子は年齢だけじゃない。脳をいじっていないんだ」

タケミは今度こそ目を見開いて、しかしそれは一瞬だった。少年に注ぎ続けている視線は、モルモットを眺めるように全く熱がこもっていない。少年はその視線を受けても、微動だにせずただ目の前の二人を見つめていた。

「それはまた、どうしてですか」

「趣味だよ。単なるね」

悪趣味だ、とタケミは心の中で呟いて、けれど顔には出さなかった。男は笑う。

「元々私は子供が好きでね。細い手足が、凶器を持つさまなど素晴らしいだろう？　それが私の手足であったのなら、さらに素晴らしい」
男は恍惚として囁いて、タケミはそれを冷めた目で見ていた。では、と切り上げる声をかける。

「では、私はそのサイボーグと共に、この街であなたに反感を持つ輩全てを殺せばいいのですね」

男は少し残念そうな顔をしたが、「物分かりのいい男で助かる」と返した。

「報酬はリーググループの方へと入れる。提示額通りの値だ」

「ありがとうございます。報酬に見合う働きはします」

頭を下げて部屋を出ようとすると、少年が小走りでついてきた。つまりは、監視役ということだ。タケミはそう理解して、少年をちらりと横目で見た。そのまま部屋を出ると扉を閉める。サイボーグなど見慣れている。が、少年は予想外の行動をした。タケミに向かって、笑いかけたのだ。

「よろしくお願いしますね、タケミさん」

サイボーグに表情がないことなど常識だ。タケミは思わず驚いて、

そしてすぐにこのサイボーグは脳をいじられていないのだった、と思いだした。つまりは、この少年は機械を埋め込まれた人間だと。

タケミはそこまで考えて、ふ、と笑い返した。

「ああ、よろしく頼む」

手を差し出すと、ちよつと考える顔をしてから、そつと握り返してきた。冷たい体温が感じられて、タケミは自分でやったことなのに少し困ってしまった。

第一章 壊す人

「わかりました。僕は地下で待機しています。連中が逃げ込んできたら一気に片をつけますので、タケミさんは気をつけてくださいね」
ホテルの一室で地図を前に向き合った状態で、タケミが言った作戦に、少年はなんでもないとこのように頷いた。

少年の腕は確かだった。眼球にレーザーが埋め込まれているらしく、標準を合わせるのにコンマ五秒もかからない。そして合わせたら自動操縦で腕が動く。

つまりは機械が動きのほとんどを占めているのだが、その比率に耐えられること自体が彼の才能だった。体の半分以上が機械になっているその体は、もはやサイボーグとも言えないのではないかとタケミは彼の体を見たとき思った。

「だが、危険だぞ。もし奴らの内の誰かがお前に向かって発砲したらどうする」

タケミが低く呟くと、少年はぱちぱちと目をしばたかせて、それから小さく笑った。

「僕の首には爆弾が仕掛けられています。銃弾が当たるなどの危機的状況になったら、自動的に自爆するようになっていきます。証拠も破片も残りません。安心してください」

ゆるやかな笑みを浮かべながら言われた言葉に、タケミは、ダン、と目の前の机を叩いた。厚い人工樹脂が一瞬たわんで、タケミは思ったよりも手に力が入っていたことに気がつく。

「それで、いいのか、お前は」

思わず怒りを表したタケミに、少年は諦観を浮かべた眼差しをして返した。

「僕の体は主人のものですから」

つまりは、主人に逆らった場合もそうやって殺されるということだ。いや、破壊される、と言った方が、正しいのだろうか。とタケ

ミはそこまで考えて、ぎり、と奥歯を噛んだ。

サイボーグの人権などない。当たり前のこと、タケミは今までそれを闇社会の常識としてとらえてきた。しかし、この少年は、サイボーグであってサイボーグでない。人間としての脳を、命を持っているのだ。

おもちやのように扱われる子供に対して、非情になれない自分がバカらしい、とタケミは思い、なぜ殺し屋風情が道德観念などこんなな憤る必要があるのだ、と自分に呆れた。

でも、命があるくせに、心を捨てていないくせに、なのにその生命を全く投げ打っているこの少年の目を見て、タケミは怒りを感じずにいらなかった。笑うのに、その目は生きているのに、諦めている。

けれど、タケミが何を言おうと、少年が何を思おうと、彼の命は彼のものではないのだ。それは覆すことのできない事実で、ということはタケミがここで怒ったとしても何の意味もないのだ。タケミは自分に言い聞かせて、沸騰した血を鎮めようとした。ふう、と息をつく。

パン、と少年の肩を叩いた。皮膚の下に、鋼の冷たい感触がした。びっくりしている少年の顔に向かって、タケミは笑ってやる。

「じゃあ頼んだぜ、嬢ちゃん。今日から約二カ月、この街のゴキブリ退治の相棒になってくれ」

少年は目を見開いてぱちぱちと瞬きをする。琥珀色の瞳の奥に、血の色が見えた気がした。

「なんですか、嬢ちゃんって」

呆けたようにそう呟いた少年に、タケミはにやけた笑いを返してやる。

「お前は坊主って呼ぶより嬢ちゃんって呼ぶ方が似合ってるよ」

そう言ってやると、少年はくしゃくしゃと笑って、それから泣いたように頬をこすった。タケミはそれを見ないふりをしながら少年の頭を撫でた。

第二章 お前なんて軽いもんだ

タケミは二階から飛び降りて十四、五人の男たちの背後に降り立った。階段を小型の手榴弾で爆破する。爆音の向こうで怒号がして、イヤフォンで耳栓をしたタケミは走りながらマシンガン撃った。照明を落とし、玄関を銃弾で封鎖する。

男たちはやみくもに銃を撃って、けれど闇と砂煙に全く視界は遮られ見えるわけもなかった。「野郎、どこだ!」「殺してやる!」と悲鳴のような怒声が続く。タケミはそれを冷笑するだけの余裕があった。

最新式のゴーグルには砂煙の向こうにいる男たちが団子状に見える。タケミはそれらに向かって確実に弾を撃ち込んだ。

銃声で判断したのか、男たちが反対方向へと逃げる。その先には、地下への通路があるきりだ。怒涛のようになだれ込む階段の向こうには、さらに銃。

一人の男が怒号をあげながら少年に殴りかかって、しかし次の瞬間、その頭が消しとんだ。

それにひるんだ男たちがたたらを踏んだところに、少年は小さな爆薬を投げた。肉片が飛び散る。殺した数は少ないながらも、歩くことができなくなった者は少なくなかった。それらに向かって、少年は一人一人に銃弾を埋めていく。

数秒の作業が続いて、最後の一人になったとき、タケミの小銃が男の頭を撃ち抜いた。少年が顔を上げる。タケミはぐると周囲を見て、それから少年の手を取った。

「行くぞ!」

走りだすタケミに、少年は逆らわずついてくる。

そのまま、タケミは背後へ手榴弾を投げた。玄関を飛び出したところで、耐えきれずにビルが崩れる。ズ、ズ、ズ、と落ちていく残骸に、タケミはそれを振り返らずに走り続けた。

車に少年を放り込み、自分も乗って走り出す。

廃墟ビルから街の反対方向へと出てから、タケミは車を止めて息を吐いた。ゴーグルも自動小銃も、足もとに投げ出してあった。少年を振り返る。

「初めての仕事にしちゃあ、上出来だ。ありがとうよ、嬢ちゃん」
そう言って笑いかけたのに、少年は不思議そうな顔をして首を傾げた。

「殺し屋さんとは、もっと静かに仕事をするものだと思っていました」

タケミは、いつもの質問だ、といつも通りの答えをする。

「最近じゃ、どこもかしこも廃墟ばかりで、監視システムすらまともに働かなくなってるんだ。こそこそやる必要なんてねえんだよ。殺し屋ってのは、今じゃ単に自分の代わりに殺しをしてくれる奴のことを指すだけだ」

そう言って、「じゃあもうホテルへ帰るか」と車を動かすと、少年は銃を太ももの皮膚の下へとしまっていた。

銃とは、なんだろう、とタケミは思う。

これがあるから自分は生きていられるし、自分が自分であることができる。けれどそれはあくまでも道具で、タケミはこれが壊れればすぐにでも新しいものを買うことができる。そういうことこそが、タケミがタケミであることだろうと思う。いつか上司である悪友が言った、「結局てめえが最後まで生き残るんだろうよ」という台詞も、そういうところから来るのだろう。

けれど、とタケミは思っ目て目を横に向ける。

この少年は、どうなのだろう、と思う。彼の女であるライフルや、体中に仕込まれた凶器、それらは彼にとって道具なのか自分自身なのか。彼は、生き残れる人間であるのか。

タケミはそこまで考えて、そろりと顎を撫でた。

「なあ、嬢ちゃん」

少年はすぐに振りかえった。

「なんですか、タケミさん」

「命の重さって、知ってるか」

少年は首を傾げた。タケミはハンドルを持ちながら、しっかりとその目と視線を合わせる。

「人間が死んだとき、きっかり二十一グラム、体重が減るらしい。どんな体格の、どんな人種の人間であっててもだ」

少年は何度も瞬きをした。理解してもらえるように、タケミはゆっくりと言葉をつむいだ。

「二十一グラム、それが人間の魂の、命の重さだと言われている」少年はなにか叫びたそうに口を開いて、閉じた。ぎゅう、と握った手のひらがぎりぎり地震えていた。タケミはそれをしばらく黙って見ていて、そしてそれから視線を外してアクセルを踏んだ。

「それ、それって、僕は、僕が死んだときも、二十一グラム、なんでしょうか、ね」

途切れ途切れに言われた台詞は、泣きそうなように聞こえた。タケミはゆっくりとその頭を撫でてやる。

「さあ。俺にはわからねえ。体の大半が機械でできてるお前は、もしかしたらそれより少ねえかもしれねえ」

少年は思わずといった風にタケミの服を掴んだ。ぶるぶると震えている小さな手は、たった今何人もの人間を殺してきたようには見えなかった。

タケミは急に車を止めた。そしてハンドブレーキを乗り越えると、ひよい、とタケミは少年の脇を掴んで抱き上げた。いきなりなのに少年が声をあげる。細い体を無理やり掲げてやると、少年の顔から数滴のしずくが飛んだ。

「だからどうした。そもそも、俺がそれを知った昔の映画はな、人間の命の重さはたったそれっぽちなのか、っていうテーマだったんだよ。こんな軽い体から二十一グラムも減ったら、お前の葬式じゃあ残るもんがなくなっちゃうわ」

そこまで言って、タケミはこつりと少年の額に額を合わせた。

「なあ。お前も俺も、軽いもんだ。だからどうした。お前にとつちや、お前自身が唯一のものだろう。胸を張っている」

タケミはそう言って笑うと、そっと少年の体を下ろした。けれど少年は座れずにずるずると沈んでしまって、タケミはその動きのまま自分もしゃがみ込んでやる。少年は、赤い目をしたまま顔を歪めて、それからくしゃくしゃと笑った。

「だからどうした、ですか」

タケミも笑って頷いてやる。

「そうだ。だから、どうした」

少年は耐えきれないというように声をあげて笑いだした。ハ、ハ、ハ、と空気中にボーイソプラノが響いて、なにかタケミは最高級のオーケストラを聞いているような気分になった。

「ああ、ああ、ああ。なんなんでしょうか、タケミさん。僕は笑いが止まりません」

「そういうときだってあるさ。お前は人間だからな」

そう言うと、少年はまた笑った。涙がこぼれ落ちたのを、タケミは見えないふりをした。

第三章 スカートと銃口

タケミは二人連れで街の大通りを歩いていった。この街の全盛期の頃よりは少なくなっただけといえども、それなりに人はいらる。不精髭のある男と子犬のような少年の二人連れは、その流れに溶け込んでいた。

ふとガラス張りのウィンドウを眺めて、タケミは足を止める。少年が振り返った。

「どうしたんですか、タケミさん」

タケミは少し考える仕草をして、それから少年の顔を真っ直ぐに見て口を開いた。

「なあ、嬢ちゃんは、スカートとかはかねえのか」

は、と少年の目が見開いて、それから怒ったような色を目に浮かべた。

「なに言ってるんですか、タケミさん。何度も言ってますが、僕は男です」

「いやそれはわかってるんだけどよ、なんてえか、言葉のあやだ。俺はつまり、お前はよく子供が着るような服は着ねえのか、って言ったんだよ」

タケミがそう弁解すると、少年はぱちぱちと瞬きをした。意味がわからない、と顔に書いてある、その下に着ているのは、どう見ても彼の主人から支給されたのであろう革でできたスーツだった。

「僕は、小さな頃にこの街に来てから着たことがあるのはこれしかないのです、そういう感覚がわかりません」

少年はなんでもないのでさう言った。タケミも表情を変えず、そうか、と返す。けれど一つ自分の顎を撫でると、ぐい、と少年の腕を引っ張った。

「じゃあ、俺が嬢ちゃんに色んな服を買ってやる。ショッピングの楽しさってのを教えてやるよ」

え、と少年が戸惑った声をあげる。タケミはそれを無視して少年の腕を引きずっていった。

まず入ったのはジーンズの専門店。「おしやれは足元からって言うが、嬢ちゃんの靴はもう十分しやれてるからな」と言って革靴を指差すと、少年は首を傾げた。その細い足に、見合う色はないかとシエルフを荒らす。

「嬢ちゃんがいつも着ているのは黒だから、こんなのはどうだ」

と言ってタケミが手に取ったのは、かなり色落ちした淡い水色。

膝が見える程度にダメージがついていた。

「何ですか、これ。穴があいてるじゃないですか」

「これがジーンズのおしゃれなんだよ。それくらいの常識もないのか」

少年が驚いたように言ったのに、タケミは呆れた顔をして返す。

少年は、「僕の周りにはスーツしかないんですよ」と頬を膨らませた。

もう一着色違いの茶色を選ぶとカードで買って、次はメンズの洋装店に行く。少年は慌てたようにタケミの手を止めようとするから、タケミもそれをかわすために小走りになりながら店へと入った。

「タケミさん！ そんなことしないでいいですから！」

小声で叫んだ少年に、タケミはあえて淡々とした表情をした。

「これは俺の道楽だ。嬢ちゃんが気にすることはない」

突き放すようにすると、少年は何か言いたそうな顔をしながらも黙った。その足にはかせたジーンズを見ながら、上に着せるのはどんなのがいいか、と合わせていく。

「やっぱり、秋だからロンティーに、……ベスト、か。ジャケットは後回しだ」

白のシンプルなロングティーマウスを手に取ると、ベストを選びを始めた。

「それともニットがいいか。お前はどっちがいい？」

タケミが尋ねると、少年は困り切った顔をしてくちびるを舐めた。

「僕には全然わかりません。というか、こんなお店が場違いな気がするんですが」

「ああ、これなんてどうだ。チャコールグレイのニット」
合わせてみて、やっぱり違うな、と棚に戻す。次に取り上げたのは黒のベストで、裏地がタータンチェックになっていた。

「これ。これだよ。いいじゃねえか」

タケミは頬をほころばせながら、これに決めた、とされるがままの少年の頭を撫でた。そのままジャケットにも手を出そうとすると、慌てた仕草で止められた。

「もう、もう結構です。十分です。これ以上は大丈夫です」

「そうか。まだ涼しくなってきたばかりだしな」

試着室で全ての服を着た少年を見て、タケミはニヤニヤと頬を緩めた。

細く、身長割に長い足には淡い蒼色のダメージジーンズがだばついた感触ではかれています。その上半身を包むのはタイトな白いロングティーシャツで、その白さを際立たせる真っ黒のベストがちらりと乗せられている。けれど後ろを向くと、目に飛び込んでくるのは秋らしいタータンチェック。なにかこの少年には、赤い色が似合う気がした。手をつけていないのは靴だけだが、真っ黒のローファ―は、なぜか一番可愛げがあった。

「なに、タケミさん。気持ち悪いですよ」

「ガキを着飾らせる親の気持ちがわかったぜ」

むしろ犬か、と笑うと、遅いパンチが飛んできた。

そのままの格好で、二人はまた街を歩く。

これは親子連れにでも見えるのだろうか、とタケミは思っただけで、援助交際のカップルのように見えた。

「どうしたんですか、タケミさん。眉間にしわが寄ってますよ」

「気にするな」

タケミは溜め息をついて、それからホテルに向かう足を少し速めた。ビジネスホテルはもう目の前にあった。わざとらしく植えられている木を横目に、二人はエントランスをくぐりエレベーターに乗る。

「それにしても、タケミさんって」

少年はそこまで言っていたん口を閉じた。タケミは「なんだ」とうながしてやる。少年は確かめるようにゆっくりと言葉を落とした。

「タケミさんって、全然、殺し屋っぽくありません。なんでそんなに、いい人っていうか、なんでそんなに普通なんですか」

タケミはその台詞に、沈黙して顎を撫でた。実を言えば、いつもとも言われている言葉だった。

どうしてあなたはそんなに常識人なの、殺し屋のくせに。

けれどタケミは元々殺しだけで生計を立ててきたわけではないし、常識が身についてから殺し屋になった。そしてタケミの精神は、そんな生活で壊れる繊細さというものを、全く持ち合わせていなかったのだ。

どうして常識を持っていることが非難されるんだ。タケミはいつも思う。

あの悪友のように悪魔の化身のような人間ならば普通だと言われるのなら、人間とはつまりなんだ、とタケミは溜め息をつく。けれど、自分が一番人間らしくないことはわかっていた。

「悪かったな、普通で」

タケミが皮肉気に息を吐き出すと、少年は慌てて付け足した。

「いえ、タケミさんがいい人で、本当によかったです」

「お世辞はいらねえよ」

「いえ本当に、僕はタケミさんに救われました」

少年の言葉は、重いくらいに、ひどく真実味があった。タケミは少年を振り返る。少年は真面目な顔をして、じっとタケミを見つめ

ていた。

「僕の体を見て、顔を逸らす人も面白がる人もいたけれど、大丈夫か、って言ってくれた人は、タケミさんだけです」

その言葉に、タケミはなんと返していいかわからずに黙った。代わりにじっと見つめ返すと、少年は笑った。まるで痛みを知らないような、無垢な笑顔だった。

「タケミさんが来てくれて、本当によかった」

その顔のまま言われたから、タケミは困ってしまった。この子供はどうして今更そんなことを言うのか、と思って、そしてなぜそんな顔で笑えるのか、と思った。今になって、この子供の存在が真実に自分の胸の中をしっかりと占めているのに気がついた。ただ、珍しい生き物を見ているだけのつもりでいたのに。

今まで思っていたよりも、自分はずっとバカで優しいらしい。タケミはガリガリと顎をかいいた。

「それを言うなら、俺もだな」

わざとらしい冗談の口調でそう返すと、なのに少年は目を見開いて、ひどく嬉しそうな顔をして笑った。

第四章 その小さな頭には

パン、と軽い音がして、最後の一人が倒れた。少年はすぐに顔を上げ、遠くにいるタケミに向かって笑いかけた。

情緒というものが、少し欠けているのかもしれない。と、その仕草を見て思う。殺しが日常になっているのかもしれない。

タケミが殺しをするのは、生きるためであり、そしてそうやって生きられるのは、割り切ることができるからだ。自分は自分、友人は友人、そして標的は標的。それとこれとは別物だと考えているから、殺すことに何のためらいもなかった。ためらってしまっは、自分が殺される。

タケミは他人のために死んでやるほどできた人間ではなかった。そんな人間になってしまっは、生き残れない。スラム街で学んだのは、こんなことだけだった。

けれどこの子供は、殺すことはいけないことだという道德觀念さえ教わっていないのではないか、と思う。

タケミには親はいなかったが、友人がいた。そいつらを傷つけられて、殺されて、殺しはいけないことだと身を持って知った。

けれど結局、その友人の片腕として殺し屋をやっている今があるのだから、道德觀念などあろうがなからうがどうでもいいのかもしれない。タケミは煙草に火をつけて深く吸った。雲ひとつない空に、まるでどこかに紫煙が流れた。

「じゃあ、飲みに行くか、嬢ちゃん」

駆け寄ってきた少年の頭を一つ撫でて、タケミは笑いかけてやる。煙草の煙を不思議そうに眺めているから、面白がって大きな円を描いてやった。

「それにしても、な」

ふとタケミは呟いてしまっ、それから我に返って口を閉じた。

自分はいったい何を言おうとしていたんだ、と責めて、けれど首を傾げて言葉を待っている少年に、どうしようもなく笑いかけた。

そんなタケミを見て、少年は一瞬表情を失った後、緩やかな、いつか見た諦めたような笑いを浮かべた。

「ねえ、タケミさん」

何だ、と返した声がいつも通りなことに、タケミは少しほっとする。二人とも足の動きは止めないまま、どこかゆっくりと、名残惜しいように歩いていた。

「僕の体、機械に侵食されているんです」

ぽつり、と吐き出された言葉は、空中をさまよった。タケミが理解できなかったからで、少年はそれをわかっているのか、再び口を開いた。

「僕の体は、機械と肉体の比率が約六・八と三・二です。この割合に耐えられることが僕の才能だと言われてきましたが、それも、もう限界のようです。十一歳からこの四年間、僕には生きられたことのほうが不思議です。肉体としての細胞が、死滅してきているのです。代わりに、機械が付け足され続けています」

タケミは呆然と少年の顔を見つめていた。いつの間にか足は止まっていた。足元に落ちた煙草の火が血で消えた。

「メンテナンスでわかっています。このままいくと僕の体は、あと一年もしないうちに、完全な機械になってしまう」

タケミはその言葉を理解して、それからゆっくりと口元を手で覆い、視線をさまよわせた。

その死に方は、あまりにむごすぎる。タケミは思って、自分が今感じているのは、仲間に対する友情でも同情でもなく、どうしようもない怒りだということに気がついた。

ふと少年の手が目に入った。それは、拳を握り、ぶるぶると震えていた。

タケミは、いきなり怒涛のような悲しみの波を聞いた。彼を抱きしめたいような気持ちが出て、でもタケミの体は動かなかった。

にらみつけるように見た彼の顔は、笑みを浮かべて、けれどその琥珀の目からゆっくりと涙がこぼれた。それを見て、タケミはいきなり彼の体を力いっぱい抱きしめた。ギシギシと軋む音がして、それは骨が鳴っているのか鉄が鳴っているのか、と思ってしまうて、タケミはなおさら悲しくなった。

「ねえ、タケミさん」

なんだ、と返したタケミの声は、掠れていた。

「僕を殺してください。僕が完全に人間じゃなくなる前に、殺してください」

タケミは、どうしてもか、と小さく呟いて、それに少年は大きく頷いた。

「はい。タケミさんに殺してほしいんです。こころのない僕でも、そのくらいの望みはあるんです」

タケミの胸が濡れることはなくて、少年の髪が濡れることもなくて、けれど心の荒れ狂う音はひどくなるばかりだった。ああ、とタケミが息を吐くと、その音が混じってしまって、タケミは、なぜ、とただ一言呟いた。

第五章 砂埃

初老の男はまるで驚いたような顔をして、それから笑みを浮かべた。タケミは立ったままそれを机の向こうに見る。

「よくやってくれた、タケミくん。正直、本当に二ヶ月でやってくれるとは思っていなかった。さすがはリーグループの殺し屋というところか。感謝しよう」

「そこまで言っていただけで、光栄です」

タケミは無表情に頭を下げた。そのまま目を上げた先には、男と、その傍らに立つ少年の姿があった。

「残りの金は全て振り込もう。出来高として色も加えておく」

「ありがとうございます」

タケミは頭の中で、上司である友人の、悪魔のような笑みを見た。ところで、と男がわずかに身を乗り出す。

「この〇二一はどうだったかね？ いい腕を持っているだろう？」

タケミは表情を変えないまま深く頷いた。

「ええ。正直彼には感謝しました」

その言葉に、男は満足したようだった。上がる口角を隠さない。

「それはそうだろう。私の今一番の自慢のサイボーグだからな」

タケミはその言葉に逆らわず頷いて、それから口を開いた。

「それで、お話があるのですが。そのサイボーグを、買い取らせていただけませんか」

男の目が見開いた。その後ろで、黙っていた少年も瞬きをした。

タケミはことさらに表情を作って、男に向かって少し目元を緩めた。「なにも悪いようにはしません。私は彼が気に入ってしまったのです。これからの、仕事の相棒に、と考えています」

男は渋面を作り、首を振ろうとした。それを遮るように、タケミは言葉を被せる。

「値段は、私の今回の報酬の倍額でどうでしょう。ご相談によっては四倍ほど」

男はそつと机のふちを撫でた。考える仕草を、タケミはじつと見つめた。しばらくしてから、男が、仕方がない、というように笑う。「わかった。そこまで言ってもらえるとは、製作者の私も〇二一も光栄だろう。〇二一、わかったか、今からお前は、この男が主人となるんだ」

男はそう言って少年を流し見、顎でタケミを指した。少年は何度も瞬きをし、それからゆっくりと笑った。

「くれぐれも大切にしてくれよ。それと、講座番号は君のアドレスに送ろう」

「わかりました」

タケミはそう言って頭を下げると、少年に向かって指を立てて手まねきをした。少年は子犬のように駆け寄ってくる。男が感心したように小さく呟いた。

「これはまた、随分と手懐けたようだな」

タケミはそれに一瞬だけ笑って、それから「失礼します」と部屋を出た。少年はその後をぴたりとついてくる。ボタン、と背後で扉が閉まった。

「これで、お前は俺のもんだ」

タケミが冗談っぽく笑うと、少年は大きく笑い返した。それが泣きそうな顔に見えてしまつて、タケミはくしゃり、と頭を撫でた。

「ねえタケミさん、これからどこへ行くんですか」

ホテルの一室へ帰ってから、スーツケースに荷物を詰めているタケミに向かって、少年が不思議そうに尋ねた。タケミは一瞬振り返って言葉を返してやる。

「俺の家だ」

え、と少年が驚いた気配がした。タケミはにやり、と笑う。

「折角、相棒になったんだ。俺の街に来るくらいいいだろう」

少年はぶるぶると震えて、それから顔を伏せると嗚咽をもらしだした。タケミは黙ったままゆっくりと立ち上がってその元へ行つてやる。

もう、自分の思いを隠すことはなかった。怒りでも同情でもない、深い悲しみ。この少年はその感情を一つの形にしたようだ、とタケミは思う。

「この、この街に十一で連れて来られてから、出るなんて初めてです」

そうか、とタケミは言つて、冷たい首筋を撫でた。けれどそこには、血の流れが感じられた。

タケミは左ハンドルの車を制限速度ギリギリの速さで飛ばす。砂ぼこりの舞う高速は空いていて、街と街との間にある荒野には人間は一人もいない。その光景が、少年には改めて不思議なようだった。じつとウィンドウの外を見る。

「そんなに珍しいか。街の外側に行けば同じ景色は見えただろう」

「そうです、けど。いつの間にか、こんなに荒れ果ててしまったんですね」

この星は、という言葉を、少年は口の中で呟いた。タケミは聞こえないふりをする。

「俺の街まで行けば、人工緑地帯くらいはある。待ってろ、嬢ちゃん」

そう言つてスピードを上げると、少年は笑いながら悲鳴をあげた。

「で、それがめえが報酬の代わりに連れてきたサイボーグってわけか」

リーは皮肉気に言って長い人差し指で少年を指した。机の上に組んだ足を乗せていて、すらりと長い体はどこか刃物を連想させる、とタケミはいつも思う。いつか、銃でなくその体で人を殺してしまふんじゃないだろうか。

「そうだ。金は俺が出す。文句はないだろう」

「ありまくりだ、このクソが！」

リーは怒鳴って、わざとらしく溜め息をついた。白い電灯にふちなしのレンズがギリリと反射する。その仕草にいちいち少年がびくついているのに気がつく、とタケミはそっと少年を背後にかばった。「サイボーグなんてつまりは殺人兵器じゃねえか。いつ電子脳吹っ飛んで俺らを殺すかわかんねえんだぞ」

「こいつの脳は人間のままだ」

タケミはそれだけ言い返すと、改めて息を吸った。

「それに、こいつはすぐに俺が殺す。問題はない」
「はあ？」 とリーは目を見開いた。低く怒鳴る。

「それこそ何言ってやがるんだ。めえはわざわざ殺してやるために、そいつをバカな額出して買い取ったっていうのか？」

リーは金のためには何をも惜しまない。脅迫、殺し、なんでもする。けれど、金のために設立した組織に手足として組み込んだのは生まれ育ったスラムからの、昔馴染みの友人ばかりだった。そしてその座は、他の連中に渡すことは一切ない。

何を言いながらも、結局は仲間思いの男なのだ。それがわかっていふから、タケミはただ笑った。

「俺がやりてえと思ったんだよ」

するとリーは、はあ、と溜め息をついて、肩をすくめた。スラングを一つ吐き出すと、それから急にがたりと立ち上がる。常に身につけている愛銃を撫でながら、少年の顔をのぞき込んだ。

「ところでめえはなんにも言ってねえなあ、ガキ。挨拶くらい言

えねえのか」

少年はびくびくと震えていて、タケミは思わず「おどかすなよ」とリーを非難した。

「おどかして何が悪いんだよ。おらガキ、なんか言ってみろ」

リーは傍若無人に言い放って詰め寄る。少年はタケミの服を握りしめながらそっと口を開いた。

「よ、よろしくお願いします……」

ふん、とリーは鼻を鳴らして言い返した。

「すぐ死ぬのによろしくもクソもねえだろうよ」

「いえその、お話はタケミさんからかねがね聞いていました」

リーはぱちり、と瞬きをする。一瞬こちらをにらんだのに、タケミは目をそらした。リーは少年に向き直ると、にやり、と凶悪に笑って眼鏡を光らせる。

「それはまた、興味深いな。どんな話だ？」

少年は迷いもなく真っ直ぐに口を開いた。

「タケミさんとリーさんは、とても仲のいいお友達だということですよ」

目を見開いたのは、リーも、タケミもだった。

まさかそんなことが出てくるとは思っていなくて、かといって悪口の数々を言ってほしかったわけではないのだが、でもこんな台詞よりはその方がマシだった、と思う。タケミは思わず後頭部をかきむしる。ふと見ると、リーは苦虫を噛み潰したような顔をしていた。

「だから、リーさんもきつといい人だと思っていました」

舌打ちの後に長い足で少年を蹴ると、びっくりして飛び上がった少年に、リーは溜め息をついてみせた。

「ガキは疲れる」

「そうだな」

タケミも同意して、ただ少年だけが、わからないという顔をしていた。

閑章

「嬢ちゃんは、どんな服が好みだ？」

コンクリートでできたマンションの一室は、標準的なものだろうが、少年はいつまでも珍しそうな顔をして眺めていた。寝に帰るだけでもないタケミの家は殺風景で、必要最低限の家具家電しかない。缶ビールしか入っていない冷蔵庫に、少年は目を見開いたものだ。

「服なんて、わかりません」

眉を寄せて首をかしげる。少年は衣服を身につけておらず、すらりとした肢体をむきだしにしていた。しかし、その肌の色に生氣はない。

「タケミさん、メンテナンス中ですよ」

服よりこちらの方が重要だろうと、少年がとがった声でたしなめる。タケミは少年の顔を見ないまま通販カタログのページをめくった。

機械に侵されすぎた彼の人形めいた身体と、向き合いたくなかった。

「お前の顔は綺麗なんだから、綺麗な服を着るべきだろ。もったいねえ」

わざとらしくふざけた調子で言うタケミに、少年も苦笑する。

金に余裕のないマスターがサイボーグにしてやれることなど限られている。いつかのようにタケミと共に死線に立つことなどもうできない。戦闘用のサイボーグはもうそこにいなかった。ただかろうじて歩行と会話ができる程度の、人形のような少年が横になっているだけだった。

タケミさん、と少年が声をあげる。その声色でタケミは次に言われることがわかってしまって、目を閉じて大きく息をつき、ゆっくりと少年を見た。

いつか見た、寂しそうな笑みがあつた。

「ねえ、タケミさん。僕の体はもういいよ、ダメです。人間の部分はほとんどないし、タケミさんの仕事をお手伝いすることももうできない。タケミさん、もう一度、お願いします。少しでも人間であるうちに、僕を殺してください」

ああ、そうだな。

タケミは目を閉じてため息のように呟いた。

彼がここに死にに来たのだということを、忘れていたがった自分をわかつていた。

最終章：愛のために愛しい君は

綺麗な朝日が差し込んでいた。がらんとした部屋に、日の光がいつぱいに広がる。

朝がいい、と言った少年の言うとおりに、タケミは雲ひとつない快晴の早朝に、仕事用に使っている防音完備の物置部屋に少年を連れ込んだ。一つの家具もない部屋は、白い壁紙が目についた。

「おいで」

タケミはいつもと変わらない声色で言って右手を差し出す。少年はそっとそれに左手を乗せる。まるでワルツを踊るかのような優雅さで、二人ともことさらにゆっくりと動いていた。

「椅子がいるか？」

「いえ、いいです。タケミさんの顔が少しでも近くで見られるから」少年は冗談っぽく笑った。タケミも小さく笑い返した。けれど、きっと今自分の目は暗い色をしているのだろう、と思った。

「ねえ、タケミさん。もう一つお願いがあるんです」

「なんだ」

少年は、タケミの手を大事そうに両手で包みこんだ。

「生まれ変わって、また人間になれたら、また一緒に買い物に連れていってください」

タケミは目を閉じた。勢いをつけて右手で少年の頭を抱きしめると、ああ、とくちびるを震わせる。

「ああ。今度は完全な人間に生まれて、今度こそ一緒に、なんでもしよう。俺はずっと、待っているから」

「その言葉はなんだか、とっても素敵な気がします」

少年は笑って、そっとタケミの腰に両手を回した。少年から触られるのは初めてで、こんなときに、とタケミは思っただけ背筋を震わせた。じわり、と腹が濡れた。

「本当に、いいのか」

なぜか今更そんな言葉が口をついてしまつて、タケミはしまった、と思う。けれど、この少年があとほんの少しでも生きたいと思うのなら、それでいいと思うことこそが真実だった。完全な機械になつても、この少年が生きていれればいい。だからタケミはこんなになるまで、少年の願いをかなえてやれなかった。死なせたくなかった。体温の感じられない胴体に、ぎこちなく動く手足に、タケミは情けないような気持ちになる。

「はい。タケミさんに殺されるんなら、いいんです。僕を人間だと言ってくれたタケミさんに看取られて死ぬのなら、僕は、幸せです」にこりと笑つた少年の、目が悲しげに揺れていた。タケミはその皺を撫でて伸ばしてやって、でもそんなことをしても意味はないのだと、思いながらもやめられなかった。

少年が、すう、と息を吸つて、大きく笑つた。満面の笑みだった。「じゃあ、タケミさん、少しだけ、さようならです」

ああ、とタケミも大きく息を吐いて、ゆっくりと腰に佩いている拳銃を右手に持ち、カチャリ、と少年の額に押しつけるように標準を合わせた。

「さよならだ」

ためらつたのは一瞬で、けれどその一瞬の内にタケミは見てしまった。少年のくちびるが、笑つたのを。

目を見開いたときには、少年の体は音を立てて崩れ落ちていた。額から血と脳漿がゆっくりと流れ出て、けれどバチバチと回路のショートする音がした。外したはずの首の自爆装置がプスプスと焦げた音をたてる。

思わずタケミはその体に縋りついて、だが閉じた瞼はすっかり死人の色をしていた。

タケミは怒涛の声を聞いて、耐えられずに叫んだ。

「嬢ちゃん、嬢ちゃん！」

彼の名前を呼ぼうとしたら、唐突にタケミは彼の名前を知らないことに気がついた。ぶるぶると震えている拳を、ダン、と床に叩き

つける。

「ああ、あ、あ、」

何を叫べばいいのかすらわからなくて、けれど口を閉じていることはできなくて、タケミは頬を伝う涙を自覚したけれど、それを止められるすべはなかった。

「バカ、バカ野郎」

それきり部屋は全く静かになって、ただ少し汚れた壁が目には痛かった。

終局…人ゆえに

「人間のまま死なせてくれ、というのが遺言じゃなかったのか」

紫煙を吐き出したリーがソファの上に足をのせる。白い合成革に砂がついて、タケミは眉を寄せた。が、無意味だと知っているので文句は言わない。ただこれからの予定に部屋の掃除を組み込む。

「殺しただろう」

「そうだな。テメエが殺したし、死体廃棄は俺がやった。だが、脳みそいじって人格のバックアップとってたなんざ知らなかったぜ」随分とせこいことをする。

リーは鋭い眼でタケミを見据えた。細長い体の上、おもちゃのように短銃をもてあそんでいる。その銃口を骨ばった背中にあわせる。ライフルの点検をしているタケミは、わざとらしい挑発に乗らない。どんなときでもリーは心底で冷静だ。長年の友人に幻滅しているときでもそれは変わらないと知っている。

にあ、と高い音がした。リーに背を向け黙々と手をうごかしていたタケミが、途端はじかれたように顔をあげる。

真っ白の長い毛を持つ猫。本物より少しばかり大きいのがアニマルアンドロイドの特徴だ。人間であったときのデータを内蔵している“彼”は、なおさら。

強張った空気を追い出すように、猫は鳴いてタケミにすり寄る。ライフルに毛を落とすことなく、その背中だけに顔を押し付ける。

先ほどよりもよほど表情を消した友を眺めて、リーは汚い悪態を吐いて忌々しげに目を閉じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0146n/>

天使の飼い方

2011年5月26日18時40分発行